

風景デザインレター from 九州(第13号)

地方の風景を守るという動きは、過疎地対策や中山間地域の生活・産業支援という問題と当然重なってくる、それらの地域の担い手というのはいったい誰なのか、生まれて初めて田植えをしながら考えました。

井上ひさしの「ポローニャ紀行」を読みながら

誰が風景保全の地域の担い手か

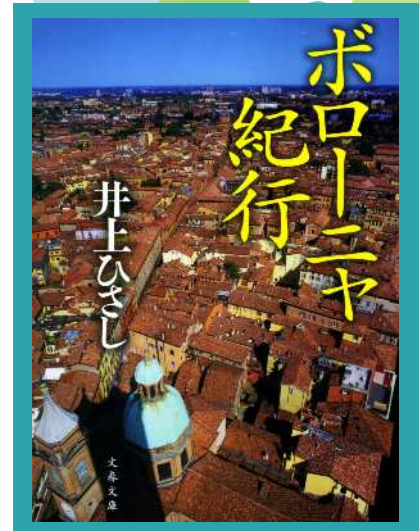
先週の土曜の「風景デザイン研究会(略称:風研)」活動に続いて、今週の土曜は「九州郷づくり共助ネットワーク研究会(略称:共助研)」の活動で、大分県大野川流域長谷地区に行ってきた。長谷地区は、大野川支川柴北川の沿川の集落で、山々に囲まれたほどよい空間のまとまった場所で、故郷(ふるさと)のイメージが強く残っている場所である。そこでの活動は、1年ほどになるが、先日そこで、生まれて初めて田植え(手植え)を体験した。

共助研とは、風研と同様にJCCA活動の中で立ち上げた産官学の研究会で、社会貢献活動を通して中山間地域が荒廃することから守るための組織である(いつかまた詳しく説明します)。面白いのは、最近、この二つの研究会活動の内容が非常に近接してきていることである。風研のテーマのひとつである棚田などの文化的景観を守るためにどうすればいいかということと、共助研の活動である中山間地域の荒廃を守るといことは当然、そのフィールドからいって同じであるため、活動の形態・内容には似たようなところがある。また、風景の成り立ち、その地域にかかわる人間の生業や生活が基本にあるため、このような活動に類似性があることも十分に予想される。

しかし、風研自体は、スタート時点では、「図」である公共施設のデザインに注目していたので、中山間地域の荒廃問題は気にな

ることではあっても主要テーマとしては意識してこなかった。だが、前回のレターでも記載したように、そのデザインの対象が、「図」としての施設のデザインから「地」である風景そのものに移り始めたころから、その地域の健康的な姿に着目することとなり、一気に近接していくこととなった。

一方の共助研は、最初は過疎地対策ということで、地域の振興計画に着目していたのだが、事例調査を行う中で、地域の人たちより「地域振興計画」などという夢物語の話ならいらないと拒絶され、代わりに今その地域で住んでいる人々の生活そのものの支援を行ってもらいたいということで活動を方向転換してきた。コンサルタントとして従来やってきていた過疎地域の地域振興計画のような、私たちから見て寂れつつある地域に、かつてのにぎわいを取り戻そうというプランを中山間地域の人たちは求めているのではなく(そんなことは無理だという地域が数多くあると当然思うべきである)彼ら、おじちゃん、おばあちゃんたちは、物質的なあるいは都会的利便性という概念からは程遠い生活をしているように見えても、非常に満足している姿が見えてきた。実際、わずかな期間であるが一緒に活動し、飲み食いをともにすると、地で採れた食材をうまく加工し、おいしい食卓があり、また、楽しい会話がある。確かに、一面だけを見ているのかもしれないが、話を



して、結構彼らは、今の地域の生活に満足しており、また、地域の誇りも持っている。ただ、小学校が廃校となる等、子供たちがいなくなることで、将来を危惧している。そして、子供たちがいなくなるという危惧は、寂しさとして現れている。彼らが活動している「地域の花いっぱい運動」は、もちろん観光地として有名になることを目指して行っているわけでもない、自分たちの生活が元気になることを願って活動している。これは、一種の病気に強くなる免疫力強化活動のようなものである。この活動を通じて、地域の連帯感が復活し、私たちのような外ものが面白半分でもいいから係わってくれることを、自分たちの地域に関心の目を向けてもらうことを期待して活動を行っている、ような気がする。

さて、今回の書籍の紹介だが、そんな活動を行いながら読んだ本「ポローニャ紀行」である。詩情豊かな作家井上ひさしの追悼のようなこともあるが、以前読んだ「吉里吉里人」を読み返すついでに読んでいます。ここには、イタリアの地方都市ポローニャで生活する人々の地域へのこだわりと、その生活の幸福感のようなものが伝わってくる。ポローニャでは、資源として、歴史的に培われた建築物や工芸や機械技術を持

つことを核として、そしてそれを支える「組合づくり」のノウハウに、この地域の元気さが表れている。ここ長谷地区も、柴北川の流れや取り囲む自然、そして各種農水産物を核として、地域の元気を維持しようとしているが、いかんせん「組合づくり」のような仕組みがない。全国的にない。

長谷地区は、現在、子供たちの数が激減し、6名の卒業生を最後に120年間続いた長谷小学校は今年の3月に閉校してしまった。そして、今回のテーマである「誰が地域の後継者になるべきか」という話にはいる。

その閉校式というべき活動した3月に、共助研のメンバーと誰がこの地域を支えていくのかという議論を、居酒屋でしたことがあることを思い出した。「地域を支えていくのは地元の出身者だろう。これまでに出て行った人々を呼び戻すことが大切だ」という意見に反応して、血統のようにそこで育った経験を持つ地元の人間の限る必要はないと思うと述べた。都会にも、地方(田舎)が好きな人間は大勢いるし、例えば、種子島には多くの都市から移住してきた人間が現在住みついて、地域を支えているという話をした。その土地で生まれ育った人間が地域を守ることに私は同感であるが、それは、今、住んでいる人たちに限定する必要はない。この考えの根本には、人間が、子孫に伝えていく遺伝子には2種類あり、ひとつは、DNAと呼ば

れる生物学的な遺伝子と、もうひとつは、文化的な遺伝子ミームという存在がある。このミームは、極めて強力な遺伝子であると思う。同じ職場で働く人間、あるいは夫婦が、何となく似てくるのはこのミームという環境遺伝子によるものである。このミーム遺伝子の存在を確信していれば、特に、そこに数できた家族に限る必要はない。地域を守るということは、生業を含む地域の文化的歴史性を継承することであると思うし、その継承者は、遠くから移り住んで来た者でもいい。移り住んで生きた人間は、確かに地元で生まれ育っていないので、独自には地域の文化的歴史性は理解できないかもしれない。しかし、今の時点であれば、まだまだそれを継承する人は存在する(しかし、あと20年後はわからない)。その人たちとともに生活する中で、その土地を自分の土地と感じ、故郷と感じることができれば、それは地域の担い手としての資格を得ることができる存在に育つと思う。自分たちが伝えなければいけないのは、美しい風景や豊かなあるいは個性的な環境ということもあるが、基本は、そこで育った文化的な感性や精神性をつなぐということで、そのことができて初めて、人間と自然が織りなす風景というものが守られていくのではなからうか。当然にその守り手は、皇室の継承問題のように血統ではなく、土地への愛着であるとおもう。

ただ、最大の問題が、職もない

地域に外から担い手が住みついてきてくれるかということがよく言われる。しかし、地域の担い手の継承であることを考えれば、職があるか否かというより(今、農作業等で生活している人々の後継者となればいいのであるから)、都市住民と農山村市民の流動性が、農村から都市への一方通行になっていることが問題と考える。都市への流れは、情報もあふれており、また、東京や大阪、福岡という目的とする具体的な場所もある(行ってどうなるというものでもないが、少なくとも目指す場所のイメージは湧きやすい)。しかし、農村への逆流は、情報が少ない上、農村としての具体的な場所の固有名詞が特にない。受け入れてくれる場所の情報がない。あるいは受け入れていいものかどうか地方は判断がつかない状況もあるということが問題だと思う。

恐らく、都市と農村の流動性を確立するには、今回の活動のように都市市民と農村市民の交流活動が基本となるのではなからうか。インターネットで情報は発信しやすく、また受け取りやすくなっただが、直接、顔を合わせ、お互いに気心が分かるようになってくることで、「どうだ、ここに住んでみんね」「そうですね、いいですね。受け入れてくれますか」「ああ、地域をあげて歓迎するよ」なんて会話が、よくある風景になることが、地域間の流動性を可能にすると思う。【続く】